氏名（本籍）	林田　一輝（大阪府）
学位の種類	博士（健康科学）
学位記番号	甲第 30 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 16 日
学位授与の条件	学位規則第 17 条第 1 項　　該当
論文題目	Sharing responsibility and goal with a co-actor change the causal attribution of action-effect （他者との責任および目的の共有は行為結果の因果帰属を変化させる）
指導教員	教授　森岡　周
論文審査委員	主査　准教授　岡田　洋平 副査　教授　松尾　篤 副査　准教授　冷水　誠

学位論文審査要旨

人間社会において，行為とそれに伴う結果の適切な因果帰属に基づいて円滑な社会的行動が調整されている。著者らは第一研究として，行為結果の原因が自己であることが明確な状況において，他者と責任を共有することが因果帰属を変化させるのかについて，temporal binding（TB）課題という実験手法を用いて検証した。TB 課題において，参加者は事前決定された数字の呈示に応じてキーを押すように指示され，キーを押してから少しの時間遅延後に音が鳴り，キー押しと音との間の時間遅延の程度を推定した。この時間遅延を短く感じるほど行為と結果の因果帰属が高いことを示す（TB 効果）。参加者に自己の行為結果に対する責任感を生じさせるため，第三者に大きな金銭的損失を与える条件と，小さな金銭的損失を与える条件，損失を与えない条件を設定した。また，他者の存在が因果帰属に及ぼす影響について検討するため，キー押しを参加者のみで行う条件と他者と一緒に行う条件を設定した。その結果，他者に大きな損失を与える条件において，一人で行う際には TB 効果が増大するが，他者と共同して行う際には TD 効果が減少することが示された。結論として，自己の行為の結果に対する責任帰属低下は，他者との行為の共有によっても引き起こされることが明らかになった。

他方，他者との目的共有による協力動作は自他のパフォーマンスや行為の結果に影響し，行為結果の因果帰属を増大する可能性が論じられてきたが，実証されていなかった。そこで，著者らは，第

二研究として，目的を共有する協力群と共有しない独立群を対象に，キー押しのタイミングによって運動精度の向上を求める課題に TB 課題を融合した実験課題を遂行し，TB 効果と運動の正確性について検証した。その結果，協力群は独立群と比較して TB 効果が高く，運動の正確性が早期に改善することが示され，他者との目的共有は行為結果に対する因果帰属を増大させることが明らかになった。これらのことから，他者との責任および目的の共有は，行為結果の因果帰属を変容させることが示された。

最終試験結果要旨

令和 3 年 2 月 17 日に主査（岡田），副査（松尾教授・冷水准教授）にて最終試験を実施した。本研究論文は海外雑誌に 2 編の論文として出版されている。プレゼンテーションにおいては，2 つの研究の背景や内容について詳細に説明された。その後，研究の背景や実験課題の設定，結果および結果の解釈について質問され，研究の限界点を踏まえつつ的確に応答された。本研究成果は，人間社会において他者と責任を共有する場面での因果帰属や目的を共有することの意義についての理解を深める知見であると評価し，主査および副査は本研究科において博士の学位を授与するにふさわしい研究であると認めた。